

平成21年度 学校評価シート（高知県立高知江の口養護学校高知大学医学部附属病院分校）

平成22年3月25日

1 目指す学校像

- 病気と闘う子どもを支え、子どもの伸びようとする気持ちを大切にできる学校。
- 自ら楽しく学ぶ子ども、おだやかに自己表現できる子ども。
- 児童生徒愛に満ち、使命感に溢れた、実践力のある教職員。

評価の基準

- A：設定した目標を十分達成できた。
- B：設定した目標に対し、ほぼ達成でき、次年度の課題が明確になった。
- C：設定した目標に対し、成果が不十分であり、課題が残った。
- D：設定した目標に対し、ほとんど達成できなかった。

2 本年度の教育目標

- 1 病気の子どもが自分の状況に対し、積極的に対処し、自己管理能力を高めていくための指導のあり方を探る。
- 2 教材研究や研究授業を通して教員の指導力の向上を図り、基礎学力の向上をめざす。
- 3 病院、家庭、前籍校と連携を密にして児童生徒理解を深め、学習の遅れ、行動面・情緒面などの課題の改善に向けた指導を行う。

評価者

- 病院関係者 4名

3 評価

項目	昨年度の課題	本年度の目標	目標達成のための手だて	自己評価	外部評価	今後の課題	
1 子どもの内面にアプローチする資質の向上	自立活動の時間の指導、放課後等を含め児童生徒の一日の生活すべてを通して、子どもの内面にアプローチしていくことができる教員の資質の向上が必要である。	・不安やストレスを抱えた児童生徒の気持ちに寄り添い、心のつながりを築くなど、子どもの内面にアプローチできる教師の資質の向上を図る。	・放課後など、授業以外での児童生徒の病棟への訪問を毎日行い、子どもと向き合う時間をつくる。 ・入院中の子どもの心の理解に関する研修(分校での校内研修または校外の研修会への参加等)を行う。	可能な限り病室への訪問を行い、保護者からの評価は高かった。資質向上に関する研修では医学部等との連携により有意義な研修が開催できた。しかし児童生徒によっては病室での時間を自分自身の時間として大切にしたい場合もあるため、実態に合わせて対応する必要がある。	B	一人ひとりの児童生徒が直面する課題に対し、個別に適切な教育対応を行うことができていた。自己評価はBだが、Aが妥当である。	今後の研修にあたっては、大学の附属病院内に学校が設置されているという強みを生かし、医学部や附属病院内のさまざまな専門家と連携して資質の向上を図る必要がある。本校の職員にとって極めて重要な資質であるため継続して取り組まなければならない。
2 個に応じた指導の工夫	特に心理面への配慮が必要な児童生徒の指導方法、教育内容の在り方について実践を蓄積する必要がある。病棟内での機器の活用や視覚的な支援の在り方について取組を推進する。	・授業の充実のため、一人ひとりの児童生徒の実態に即した教材・教具の開発を行う。	・障害の重い子どものコミュニケーション支援機器に対応したパソコン用のソフトウェアや、教科学習に活用できる基本的な学習ソフトウェアの開発等を行う。 ・児童生徒の実態に応じて視覚的な支援等を充実させる教材・教具の工夫や改善を行う。	主眼とした障害の重い児童生徒の教材開発はほぼ達成でき、それを活用した授業により自発的なコミュニケーションの力を引き出した。新たな課題に向けて、院内の専門家と連携をとりながら更に工夫・改善する必要がある。	A	学校とリハビリテーション部が連携した取り組みができ、病院としてもこれまでとは違った子どもの変化を感じ取ることで1年であった。評価Aは妥当である。	このことについては平成22年度以降の中期目標1に位置づけた。24年度には他校においても研究成果を活用できるよう整理し、Webを通じて積極的に情報発信できるよう取り組みを進める必要がある。
3 病院、家庭、前籍校等との連携	病院からの外部評価を次年度の学校運営の改善に確実に反映し、病院との連携を更に強化する。前籍校復帰後の小中学校等への追跡調査の内容を見直し、前籍校との連携の在り方を改善する。	・病院や関係者との連携を充実させ、日々の実態把握や円滑な前籍校復帰を図る。 ・分校に求められるニーズについて把握し、取組の改善を図る。	・医教連絡協議会や医教連絡会を継続し、必要に応じて病院内の各専門分野と連携して三(四)者会を機動的に実施する。 ・追跡調査や学校評価アンケートの様式等を改善し、分校の課題を整理して、実施可能な内容については年度内の改善を図る。	必要と判断した3件のケースについて3(4)者会を開催できた。本年度は病室内での高校入試も実施でき、進路保障ができた。また、その他の在籍した中3生についても全員進路が決定し、病院や関係者等と連携して分校の役割を果たすことができた。	A	教材開発や高校受験、退院後の教育対応などで、これまで以上にさまざまな部署、機関と連携・協力をして行うことができた。評価Aは妥当である。	平成22年度以降の中期目標3において前籍校との連携を一層強めるため、居住地校交流を位置づけた。実施可能なケースについて円滑な居住地校交流が推進できるよう病院や前籍校との共通理解を図る必要がある。